仕事 わたし流

「男社会」でも自分らしく

主婦感覚 イメージを形に

「二十年前に作った吊り戸棚でも、使い手の主婦が年齢を重ねると、腰が曲がり、使いにくくなることがある。そういう施主さんの本音を聞きだせるのは女性同士、主婦同士だからこそ」。

リフォーム業を営んで二十四年の塚本明美さん（五七）＝京都市西京区＝。職人をはじめ女性はきわめて少ない「男社会」で自ら営業に回り、塗装や屋根、畳などの協力業者らとの打ち合わせに忙しい日を送る。

夫の現場へ

京都の高校を卒業して四年間、和文タイピストとして会社勤めをした後、左官職人の夫と結婚。大阪万博が開かれ、好景気に沸いた年だった。人脈を生かして、多くの仕事を取ってくる同業者もいたが、夫は職人肌で堅実派。乗り遅れないように進言しても、仕事にきっちり時間をかける姿勢は変わらなかった。

専業主婦だったが、外で働きたい気持ちが募った。長男が生まれたころから、子どもをあやしながら、夫について新築の仕事現場に足を運んだ。夫を手伝い、無給で道具を運び、洗った。

好奇心で通い始めたものの、男性ばかりの現場に、気後れした。手ぬぐいで顔を隠し、女性であることがわからないように装ったこともある。

事業を決意

作業の合間に聞く大工や職人らの話にひかれた。木造軸組が組まれ、屋根ができ…といった過程がわかり、完成後は見えなくなる場所に施される、耐震などの工夫に興味がわいてきた。月半分のペースでの現場通いが九年間続いた。

事業を決意したのは三十四歳のとき。子ども二人は小学生になり、手が掛からなくなっていた。建築関係のモノを作る仕事に関心があった。夫や職人仲間の協力をあてにして、リフォーム業を選んだ。下請けでなく、直接、施主と相談して仕事を進めていける点も魅力だった。

必死さ伝わる

ところが、夫たちの協力はあてが外れた。本業で手いっぱいだった。仕入れ先などを回って独自に職人の人脈をつくった。必死さが相手に伝わったのかどうかわからないが「次から次へと助けてくれる人が見つかって。本当にラッキーだった」。

仕事で一度だけ、泣いたことがある。虫の居所が悪かったのか、施主の男性にこっぴどく怒鳴られた。仕事は仕上がったが「もし男性業者が相手なら、怒鳴ったりするだろうか。女性だからだろうか」と思うと悔しかった。

リフォームの仕事で思うのは、業者側から見れば「男社会」でも、要望を話したり工事中に家にいるのは、ほとんどが主婦だということ。工事費をわずか数千円削るだけでも、その分をおかず購入に回せるといった、生活に根ざした見方は、主婦同士でないと伝わりにくい。二世帯住居のキッチン改修の場合、嫁と姑（しゅうとめ）の双方に使い勝手が良くするにはどうすればいいのか。じっくり話し合い、見積もりは数日かけて出すことにしている。

「主婦の感覚で、施主の漠然としたリフォームのイメージを、はっきりとした形にできるよう提案していきたい」。夫と建築士の資格を取った長男の協力も得て、生涯現役を目指す。

（文化報道部　前多直介）

塚本さん開業まで

1968年3月	高校卒業。京都市内の会社で和文タイピストとして働く。
70年3月	結婚。
72年1月	長男を出産。
78年ごろ	夫の仕事現場で雑用。
82年1月	リフォーム業を始める。

■塚本さんにとって仕事とは…

「生きがい。お金だけでなく、仕事の結果に喜んでもらえるのが何より」

リフォーム現場で職人と打ち合わせる塚本さん（京都市西京区）

リフォーム業の現状　市場規模七兆円（住宅リフォーム・紛争処理支援センター調べ）ともいわれるリフォーム業界は、業種が多様なため、工務店やハウスメーカー、専門業者に限らず、さまざまな業種が参入している。消費者からは価格面などでわかりにくい部分も多いとされる。リフォームを考えている人が、不足している情報として挙げる項目は「費用の目安や積算基準」や「依頼業者選びの基準」が上位を占める（住宅リフォーム推進協会調べ）。

一方、住宅建築やリフォームの実務経験十年以上で、所定の講習を受け、考査に合格した人が登録できる「増改築相談員」は、全国に約一万八千人。そのうち女性は約八百七十人（同）。

大工を想定した制度だが、リフォーム専門業者やインテリア関係の業者などで登録している人もいる。

リフォームの工事現場はまだまだ「男社会」といえそうだ。